国際交流センターだより vol.19

ミシガン大学を訪問しました（4月1日～5日）

免疫学・教授　伊藤 利洋

本学と学術間連携を締結している米国ミシガン大学（学生数 42,000 人）を訪問致しました。今回の訪問を通して、本学学生のリサーチクラークシップ（研究室配属）における受け入れの拡大、ミシガン大学病院における臨床実習が実現することになりました。さらにミシガン大学学長 Santa Ono 氏との面会が実現しました（写真1）。今後とも本学の国際交流推進に向けて、尽力してまいります。

（写真 1）ミシガン大学学長面会

（写真 2）ミシガン大学医学研究棟（BSRB）

福建医科大学（学術交流協定校）からの研究者（2024年11月29日-2025年3月2日）

本学の学術交流協定校である、福建医科大学（中国）の研究者が、整形外科での研修を行いました。受入れにご協力いただきました先生方ならびにスタッフの皆様に、心より感謝申し上げます。本学から福建医科大学への派遣も可能です。ご興味のある方は、国際交流センターまでお問い合わせください。

福建医科大学（Quanzhou First Hospital affiliated to Fujian Medical University）

黄灿阳（Huang Canyang）

First of all, I would like to thank the leaders of the International Center of Nara Medical University for providing me with the opportunity to study in Japan. During the study period, I got to know the internationally renowned orthopedic professor Tanaka and the excellent spine team. After learning the spinal surgery under the leadership of Professor Shigematsu, they are artists on the operating table with such meticulous, precise, accurate and orderly cooperation in medical anesthesia.

At the same time, other professional groups are also very excellent, and I had the honor to visit the most famous orthopaedic combine TAA of Nara Medical University. Professor Tanaka is in a leading position in Asia and the world in this aspect. They are very serious and enthusiastic to answer our questions. The department of Orthopaedics every Tuesday teaching conference and ward rounds are of great help to improve the knowledge of our trainees, which is a kind of department management method worth learning.

During my study, I visited the new campus of Nara Medical University and witnessed the new development of Nara Medical University. I hope that the cooperation between Fujian Medical University and Nara Medical University can be promoted to a higher level. These three months are three months of clinical technology learning, three months of feeling the exchanges between the two university, and more importantly, three months of feeling the friendship between China and Japan.

Thank you again to all the faculty of Nara Medical University.

脊椎グループの先生方と

新キャンパスにて

令和６年度 第３回 若手研究者国際学会発表助成事業 助成者決定（4月4日）

令和６年度　第３回若手研究者国際学会発表助成事業の助成者は、下記のとおり決定しました。この事業は、若手研究者の国際学会等での発表の機会を増大させ、国際的に活躍できる人材の育成を推進することにより本学における研究活動の一層の活性化を図るため、20 万円を上限とし往復運賃相当額及び宿泊費相当額を助成しているものです。募集は年３回、次の募集も予定しておりますので、皆さまの積極的なご応募をお待ちしています。

所　属（科 目）	職 名	氏 名
地域医療支援・教育学	講師	川崎 佐智子

海外リサーチ・クラークシップ成果報告：卒業生のその後

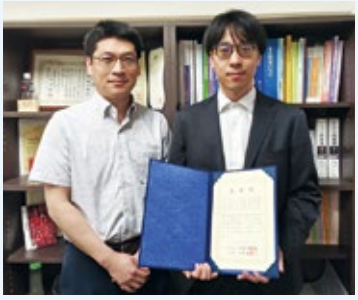
本学卒業生で、海外リサクラの 1 期生（平成 28 年度）の、未来基礎医学で在学中〜卒後も研究に従事していた坂口義彦さん（筑波大学）が、筆頭著者として論文を発表しました。この論文が、2024 度の日本生理学会入澤宏・彩記念 JPS 優秀論文賞を受賞し、また 2025 年 4 月から開始の日本学術振興会のフェローシップ（DC1）にも採択されました。

坂口 義彦

・筑波大学 グローバル教育院 ヒューマニクス学位プログラム
・筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構
・筑波大学 医学医療系 バイオインフォマティクス研究室

＊**論文タイトル**：Identification of three distinct cell populations for urate excretion in human kidneys
＊**Published**：02 January 2024

このたび、上記の筆頭論文が、入澤記念優秀論文賞および細胞と分子生理 / 上皮膜研究グループ J.P.S. 優秀論文賞という、二つの生理学会の論文賞に選ばれました。出会いと幸運に恵まれたおかげで、多くの研究者に関心を持っていただける論文となったことを嬉しく思います。海外リサクラをきっかけに研究を始め、未来基礎医学の森英一朗先生・生体分子不均衡制御学共同研究講座の永森收志先生（現・東京慈恵会医科大学）のご指導のもと、論文をまとめることができました。また、共同筆頭著者である松林先生や Wiriyasermkul 先生をはじめとした、学内外の共著者の先生方には、貴重なフィードバックをいただきました。改めて、ご指導いただいた皆様に深く感謝申し上げます。今年度から、日本学術振興会 DC1 の支援を受け、「遺伝学と情報工学の融合アプローチによる睡眠の分子制御・生理的意義の解明」というテーマで研究を進めています。この受賞を励みに、今後も研究を進めてまいります。


森先生と

授賞式にて

医学部長　嶋 緑倫

リサーチクラークシップは本学独自の教育プログラムであり、研究マインドの醸成を目的として、国内外の大学や研究機関で実際の研究を学ぶ機会を提供しています。坂口義彦先生は、海外リサクラの第 1 期生で、リサクラ後も未来基礎医学教室で研究に励まれました。卒業後も研究を続けられ、昨年、ファーストオーサーとして発表された論文が日本生理学会において優秀論文として表彰されました。この素晴らしい成果を嬉しく思っています。今後の益々のご活躍を祈念しています。

生理学第二　教授　堀江 恭二

本学在学中、坂口さんが遺伝子発現の高度な情報解析に励まれている姿を拝見しておりましたが、その成果が高く評価されたことを、大変嬉しく思います。この分野は、学部学生を含む若い方々が無限の可能性を発揮できる領域であると常々感じております。その点で、今回の坂口さんの受賞は、本学の学生にとっても大きな励みとなり、将来への道標を示すものとなると思います。さらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

医学科長（免疫学・教授）
伊藤 利洋

2016 年度から新たに医学科 2 年時に海外を含む研究室配属（リサーチクラークシップ）が導入され、坂口さんの学年がリサーチクラークシップを体験した初めての学年となります。医学生として早期に医学研究の重要性を認識し、奈良医大の卒業生として医学研究の世界で活躍する坂口さんの姿は、大変嬉しく頼もしく思います。今後の更なる飛躍と後輩たちにも良い刺激となることを期待しております。

未来基礎医学　准教授
森 英一朗

2017 年 4 月、海外リサクラから戻ってきたばかりの坂口君が「海外リサクラに行って研究が面白くなりました」と目を輝かせてやってきました。その後、部活と研究活動を両立させながら、在学中に原著論文 5 報（筆頭 1 報・共著 4 報）と卒業後に筆頭論文 1 報を発表しました。さらに、臨床研修中には症例報告を筆頭著者としてまとめました。是非、坂口先輩の背中を目標にする在校生が一人でも多く出てくることを期待しております。